

## 俺たちの卒業試験

(「人権文化の花咲くまち西宮をめざして4」より)

作・仲島 正教

「なんやその姿勢は！」

そんな大きな声と同時に、隆志は首根っこを持ち上げられ、教室は一瞬にして静まり返ってしまった。俺と先生との出会いはこうして始まった。

4月7日始業式、どこかの学校からやってきた男の先生が俺の担任になった。体育館での着任式では、笑顔でおもしろいことをしゃべっていたのに、教室に入ると一転して怒鳴り声。俺はこれからの1年が不安になった。そんな6年2組のスタートであった。

伊東正人 34歳。髪は短く色が黒くて声がやたら大きい。よくいえばスポーツマンタイプ。でも足は短い。かっこよくもなくかっこ悪くもない普通の先生だった。

「学級目標は『支え合う仲間』だ。どんな時もいつもここに立ち戻ってやっていこう」体がこそばくなるような言葉を先生は言った。そして黒板の上には「支え合う仲間」と大きく書いた紙を貼ったのだ。低学年や中学年ならともかく高学年それも6年になった俺たちにこんなくさい言葉は、通用しないと思った。たしかに俺たちのクラスにはいろんなやつがいた。障害のあるやつもいたし、在日のやつも、それから同和地区のやつもいた。でも俺たちは障害のある子にも優しくしてあげてたし、韓国朝鮮のことや部落差別のことも勉強してたから、差別はいけないことだってことぐらいちゃんとわかっていたつもりだ。いまさら「支え合う仲間」なんて言わなくてもいいよという気持ちだった。そんな俺たちだった……。

授業っていうのは、普通は先生がやってきて「さあ始めるぞ」で始まるはずなのに、この先生は教室に来てただ黙って座っているだけ。俺たちはその間ずっとおしゃべりを続けていた。でもいくらたっても始まらない授業にしびれを切らして腰を上げるのは、いつも俺たちのほうだった。俺や雄一が前に出て「国語の本を出してください……。」と始めてしまうのだった。算数の時間もそうだった。先生は教えてくれないのだ。仕方なしに自分たちで教え合いをしていくのだ。体育でバスケットをしたときも「ルールはなし」なんて先生が言うから体育館の中は大混乱になってしまった。いつもそうだった、始めは混乱するのに不思議とだんだんと落ち着いていってしまうのだ。そのたびに先生は「君たちはすごい。支え合う仲間だ」なんて言うもんだから、俺たちは調子に乗って何でも自分たちでやってしまっていたのだった。

両足が不自由で装具なしでは歩けない裕美のために俺たちは荷物も運んだし、体育では彼女のための特別ルールも考えた。裕美が転んだら誰かが必ずそばに行って起こしてやっていた。そんな俺たちを先生は「これが支え合う仲間だ」と大いにほめてくれた。でも俺

たちはこのあと裕美を起こさなくなった。裕美が起こしてもらうのを待つようになったからだ。だから今度は「自分で起きろ！」と言うようになった。最初は涙を見せた裕美だったが、だんだんと自分で立てるようになってきたのだ。そう俺たちは裕美をかわいそうだ、何かしてあげなければと思っていたのだ。あいつを特別なやつと思っていたのだ。あいつに対して「してあげる自分たち」を優しいと勘違いしていたのだ。俺たちは「してあげる仲間」じゃなくて「いっしょにする仲間」なんだ、そのことにやっと気づいたのだった。先生は「これが本当の優しさだ。」とえらく感動してくれた。

ある時、先生は「お前たちは口だけや、本当の『支え合う仲間』じゃない」と突然怒り出して、黒板の上の「支え合う仲間」の紙をはずして捨ててしまった。その時「この野郎！何するんや！」と先生がはずした紙をもう一度貼りなおした俺がそこにいた。最初は「支え合う仲間」に冷めていた俺たちが、知らないうちに「支え合う仲間」を大切にしている自分たちに気づくのだった。先生のわなにどうやらはまってしまったらしい。

そして事件は起きた。卒業まであと1ヶ月と迫った2月の終わりごろ、先生は急に、こんなことをしゃべり出した。

「今から卒業試験をする。この試験に合格しなかった者は卒業させないぞ」  
ずいぶん乱暴な言い方だった。

「今からですか？」

「そう、今からだ」

「どんな試験ですか？算数？社会？理科？・・・」

「違う。そんなんじゃない」

「じゃどんなの？」

「問題はこうだ。『このクラス37人いるけど、人間のいい者順に1列に並んでみる』というものだ。さあ、今から並んでもらおう！」

「えっ、何って？もう一回言ってみて」

「人間のいい者順に1列に並べ、だ」

「人間のいい者順？先生、そんなに急に言われても私ら困るわ・・・」

「先生、この1年間先生は、人間には順位なんか無い、それぞれにいい所があるからそれを認め合っていくものだ。それぞれの良さを発揮しながら支え合って生きていくものだ。って毎度毎度言ってたじゃないか。今さら何を言うんだ」

「そうだそうだ、先生が今まで言ってきたことはうそなのか？」

「それはうそじゃないよ。でも今日は違う」

「先生、おかしくなったの？」

「・・・」

みんな戸惑うばかりだった。

「先生はおかしくなったりはしていないよ。先生は冷静だよ。さあ並んでみろよ。川上君、このクラスで一番人間のいい者は誰や？ 答えてくれ」

「……」

「じゃ、一番悪いやつは誰や？」

「……。先生、このクラスには悪い人は一人もいません！ みんな・いい人です」

びっくりした、川上が泣きながら先生に訴えていた。俺にはあんなことは言えない。川上はすごいやつだ。俺は胸が熱くなるのを感じた。と同時に先生に対して怒りがこみ上げてきた。隣の席の恵子は

「先生なんか大嫌いだ、馬鹿！ みそこなった」

ってつぶやいていた。俺も同感だった。教室は異様な雰囲気だった。先生だけがいやに冷静で、みんなの顔は怒りに満ちていた。

それから 30 分ほどたっただろうか、雄一が前に出て先生とみんなに言った。

「先生、もういいよ。先生はどっかに行ってくれよ。あとは俺たちが考えるよ。」

先生は 1 階の職員室に降りていった。雄一は俺たちに

「この卒業試験は、きっと先生が俺たちを試しているんだ。きっと何か違う答えがあるんだと思う。みんなで考えてみようぜ。」

と言った。雄一の言う通りかもしれない。俺たちはそれからみんなで知恵をいっぱい出し合い考えていった。

「できた！」

「これで OK や、だれか先生を呼んで来いよ」

「日番行けよ。佳織と信也職員室に行ってくれよ」

佳織と信也は先生を呼びに職員室へ向かった。職員室で先生は窓の向こうの北側の山をじっと見ていた。日番の呼びかけに少しニタツとして席を立ってきた。

すりガラスの向こうを先生が歩いてくるのがわかった。少し緊張感が走った。先生がドアに手をかけた。ガラガラズー。

先生は、入ってきてみんなをしばらく見渡すといきなり

「このクラスで一番いい人間は誰だ？」

と聞いてきた。俺たちは迷わず全員が手を挙げた。これは打ち合わせどおりだった。先生は続けて聞いてきた。

「このクラスで一番悪い人間は誰だ？」

俺たちは戸惑った、でもそれはほんの 2 . 3 秒だった。またまた全員が手を挙げた。少しの間、沈黙が続いた。……。

「そう……、合格や、全員合格や、全員無事卒業や、おめでとう」

と言って、先生は声を詰ませた。俺たちは今、男女交互になって、みんな中を向いて一つの輪になっていた。その真ん中に先生がいた。なんともいえない一瞬だった。柔らかな空気が漂っている気がした。

「こうして輪になっていると、みんなの顔がよく見えるだろう。ああ、あいつは今とってもうれしそうだ、そばに行って俺も一緒に喜びたいな。向こうにいるあいつは今悲しそうな顔をしているぞ、どうしたんだ？元気出せよ。……輪になっているとお互いに喜びも悲しみも一緒に共有できるんだ。そんな仲間がここにいる。本当に幸せなことだ。この先、小学校を卒業して中学校に行くんだけど、違う中学校に行く子、一緒の中学校だけどクラスやクラブも違う子、みんなそれぞれの道をこれから歩いていくんだ。その中では楽しい事だけでなく、つらいことにも必ず出会うんだ。そんな時、今日のこの卒業試験を思い出してほしい。きっと勇気が出てくるはずだ。きっと希望が見えてくるはずだ。そうおまえたちは本当にすばらしい仲間なんだから……」

そう言いながら先生の頬には大粒の涙が流れていた。俺の隣の真弓も俊介も泣いていた。さっき「先生なんか大嫌い！」と言っていた恵子は肩を震わせながら泣いていた。しかし俺は涙を流さなかった。精一杯我慢した。

あれから9年の月日がたった。俺は大学の3回生になっている。泣いて訴えた川上も大学3回生、今就職活動に精を出している。始業式に怒鳴られた隆志は会社員として立派に働いているし、雄一はフリーターをしながら元気に暮らしている。恵子は先生になるといって教育学部に通っている。障害のある裕美は大学で福祉の勉強をしている。そんな俺たちは今でもみんな仲がいい。みんなバラバラの人生を歩んでいるはずなのに、よく連絡しあっている。この前、市の人権教育研究集会というのがあって、俺たちは若者代表ということで、そこに参加してきた。差別の問題を話し合っていたけど、俺たちにとってはそんなにたいした問題ではなかった。障害があろうと外国人であろうと部落出身であろうと、お互いに認め合い尊敬しあえれば、それで差別なんかなくなると思っている。俺たちのクラスにもそれぞれいろんな立場の子がいたけど、みんなが認め合っていた。今、もしそんな仲間を差別するやつが出てきたら、俺は話しに行くよ。そんなばかげたことはやめろよって。

そうそうあの時の先生は、今たしか43歳。研究集会の時、隅っこから俺らのこと見てくれていた。髪に白いものが出てきたけど、相変わらず元気そうだった。

俺は4月になったら、夢の実現に向けて、アメリカに行く。親は心配しているけど、あの先生は「チャレンジや！」って声をかけてくれている。そんな親のためにも、先生のためにも、恋人のためにも、そして何より自分のために、夢に向かってスタートしていきま

この「俺たちの卒業試験」は、フィクション  
です。よって、登場する人物はすべて架空で  
あり、実在しません。

2003.3.18 作・仲島 正教